

無無明

和樹

御遠忌テーマ

親鸞さま、なぜ、お念仏なの？

— 出会おう、語ろう、今ここで！ —



自分ということ

親鸞さまは自分のことを言うのに、「罪悪深重・煩惱熾盛の衆生」と言いますよね。自分というのは自分の身で負えないほどの業を背負ってる、「どうしようもない者がここにおった」ということを言うわけです。

知らぬうちに僕らの毎日はこの世の中の常識の中で暮らしています。そのことは大事なことなんですけど、自分ということが問えなくなってしまうってわけです。

親鸞さまは、罪悪深重のものを背負っているから、こんな身が修行をして仏になろうとすることもできない、と。だから、修行ということがないわけです。それに対して、道元さんという方は「ともあれ修行せよ、全身心をかけて修行せよ」と言うわけです。

道元さんは「草木叢林の無常なる、すなわち仏性なり、人物身心の無常なる、これ仏性なり」とも言う。僕らの普通の思いでは「この間、正月だったのにもう梅が咲いて、早いね」とか「ついこの間30超えたばかりなのに、もうこんなおっさんに

なつてしまつた」とかね、そういうことで無常を感じるわけですよ。無常っていうのは自分が感じる問題だと思ってる。

でも仏教で言う無常っていうのは、無常が主体なわけです。無常としてある中にこの「オレ」って言っている者がおる。梅なら、梅の木が今花咲いていることで「梅」っていうことを思う。でも人間が「梅だ」と思う前に、「梅」とも言えないものがここにおるわけです。これ（自分）

清浄なるもの

村田和樹先生

石川県輪島市・龍昌寺住職(曹洞宗)

2019年2月9日

も同じです。「オレは修行ができる身でない」とか言う必要がない。そのまま、これ（自分）が無常として、仏性としてあると言う。

修行寺にて

僕が世話になっていた修行寺では、毎日9時間座ります。朝5時から8時まで座り、終わると掃除してご飯食べて、また9時から12時まで座る、昼から5時まででは作務の時間ですけど、大概みんなに見えんようにして

「何にも考えるな」って言われても、何にも考えないことなんて、そんなのできやしないです。妄想ばかりです。妄想が止んだらね、眠ってるんです。眠って目が覚めたら、ぼんやりしてると、その3つの繰り返します。

近代的自我

昔は、神様がおられてはじめて個（わたし）ということが成立し、個ということの意味を持たたわけです。だけど、今の僕たちは、神様という存在、上位概念がなくなった世界で生きています。そうした近代的自我は、自分で意味、理由を見出して、くほかなくなった。自分で意味、理由を探したら、お金とか能力

一生涯懸命本読んで、また晩の6時から9時まで座る。そうして毎日の中に、接心と言ひまして、日に14時間、朝4時から晩の9時まで座る日がある。

老師は「文句なく座れ」って言うんです。「意味や理由を探さな」と。壁に向かって座ってるんですけど、皆さん、10分でもいい、座ったことありますか？ ちよつと座ると、なんて時間が長いことやら、と思うですよ。

老師は「勉強するな」って言うんです。「ただ座れ」と。「座つてからどうするんですか」と聞くと、「10年ただ黙って座

とかが自分ということを目指し示す価値になったわけです。

ゴリラの研究者がこんなことを言ってるんです。ゴリラっていうのは哺乳動物の中で唯一人間に近い行為をする。熊でもライオンでもオスっていうのは子どもを持ったメスにとつては最も危険な天敵なんです。子どもを食い殺してしまう存在だから。だけどオスゴリラは人間のように子どもの世話をするらしいんです。

そんなゴリラだけど、ご飯の時はそれぞれが勝手に葉っぱを食べてるっていうんです。研究者は言うわけです。「人間っていうのは不思議なもんだ、わざわざご飯を食器で用意して、みんなが集まって会話しながら食べる」と。だけど、現代ではみんな忙しく、お母ちゃんはどこそこの仕事、お父ちゃんもどこそこの仕事、子どもは子どもで塾やらで、帰ってくるの晩の9時や10時だそうなんです。「こういうの、本当に進歩した社会って言えるのか？ ご飯も一緒に食べられないことが裕福な社会なのか？」ということを研究者は

問うわけです。

僕たちの持つてる自分というところ、自分は自分なんだっていうふうな「自分」っていうのが一体何かと問うたらね、よく見えんわけです。自分自身にね、名前とか年齢とか、こんな仕事してましたとか、そんなこと自分で言うても通用しないっていうか、そんなの変でしょ。世間一般の中では通用させてるけど、自分自身には通用しない。「一体、自分って何なのか」って言われたら、ものすごく困る問題です。バンザイするより手がないんです。最終的には、「人間ですから」とか、「人間だもの」って言うほかないわけですが、じゃ、「人間って何ですか」って言われたら、「猫じゃないし、犬じゃないし……」ぐらいなんです。

矛盾する存在

ハイデガーという方は「存在するとは何か」ってことを生涯問うた人物です。「私と言えらるものがここにあるということは、いつでも今このままここで完結している。と同時に、死があるということとは、

未だ死んでいないから未了である、完結していない」。この矛盾することが同時に起きているのが「存在」と言う。

それは、私たちの頭では考え得ない「言葉を超えた世界」ということです。自分という存在そのものが、すでに自分で捉えることのできない存在としてある、自分の思いを破られた世界がこの自分自身の上で起きているぞって言うわけです。そして、その破られた世界があるってことがお念仏になつていくわけです。毎日9時間座るといって本人は一生懸命、意味、理由を知らぬ間に探してて、どうしようもないって思っているけど、そういうこと関係なしに、言葉が破られた世界が「お前、このままあるぞ」ってことを示すのが坐禅であつたり、お念仏なわけなんです。

思い込みの世界

「毎日、なんで座ってるのか」って言われたら、たまたま曹洞宗の寺に生まれたからとしか言い様がない。「なんまんだぶつ」っていうことを全く知らない人がね、言えるかって

言ったら、これ言えないんです。自分がひっくり返る理由がないと、「なんまんだぶつ」とは言えない。だから、皆さんが「なんまんだぶつ」ってこの場で言えることはすごい縁をもらつてるわけです。

だけど、同時に、見えなくさせてるものもあるんです。知らぬ間に、自分っていうことのふまえ方を、念仏することとでそこに意味を見出ししているわけです。お念仏することが自分の価値になつてる、いいことになつてるわけです。だから信心つてることが、思い込みの世界になつてるわけです。

厄介ですね。知らぬ間に、念仏している自分がいいことになつていて、「自分が念仏する」わけです。どこかで大事なシーンがすり替わつてるんです。自分っていうことが通用し



感話 植山小夜子さん

ないもの、破られるものとしてあつたっていうことがお念仏であつて、その都度、自分に問うていくしか手がないわけです。

「親鸞さんの問い」を「自分の問い」のように勘違いしてるけれども、それは「親鸞さんの問い」です。それぞれがそれぞれの比べられないものいっぱい持つてるはずなんです。その中でお念仏することとで、自分というものを問うていく、人間とは何なのかっていうことを問わざるを得ないものとしてここにおつたっていうことが、お念仏することの一番大事なシーンじゃないかと思つてるんです。

聞き書き担当者・感想

ちよつとした緊張も相まつてのどきどきと、話がどう展開していくのかというワクワクな気持ちで聞いていました。言わんとしている内容とはちよつと、言いたいというその熱がこちらまでひしひしと伝わってきて、楽しかったです。

(藤谷風)